

# 中高一貫の漢文指導

## ——中学漢文指導の充実を考える—— 後編

持山育央  
横地武

### ① 概論

### ② 総論

1. 中学学習指導要領と古典
2. 中学校での古典（漢文）指導の実態
3. 高校での漢文教育の位置づけと現状  
(1) 国語Ⅰでの古典（漢文）の取り扱い  
(2) 古典Ⅰについて
4. 漢文指導の問題点と克服の方法 (前編)

### ③ 実践

1. 中学校での漢文授業の試み
2. 生徒の意識と実力（アンケートと試験の結果）
3. 高校生との比較——中学と同じ教材を用いて——

### ④ まとめ

(後編)

### ③ 実践

#### 1. 中学校での漢文授業の試み

##### (1) はじめに

高校一年の古典の授業を受け持って痛感するのは、生徒が古文・漢文に対して抵抗感が強いということである。また、本来の古典に親しみ味わう（鑑賞）という目的に達する前に、語彙や文法に対する抵抗からそれを拒否してしまう傾向も否めない。我々が使用している現代語の源泉である古文、そして、その源である漢文を現代語とはかけ離れたものとして捉える生徒に、一抹の寂しさを感じずにはいられない。

中学国語の古典は、「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる（学習指導要領）」ことを目標に据えている。また、「その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、やさしい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章など（同前）」を用いることになっている。

ここで漢文に話題を絞ると、本校で採用している学校図書「中学国語」では、第一学年で「中国の故事」（蛇足・矛盾）、二年生時には「垓下の戦い」、三年生時には「春望（唐詩三編）」を扱う。共に分かりやすく興味を持つように書かれていて、導入教材として漢文に親しむ態度を育てるには充分である。しかしながら、中学の漢文学習では、解説や口語訳に頼る部分が

多く、実際に漢文を読んだという実感が無いのが現状である。高等学校に入学し、中学校で読んだはずの漢文に対して、抵抗を感じるのも無理はない。

中学3年生での漢文学習を高校漢文の入門としてとらえ、漢文学習での基本的事項を中学3年のこの時期に習得させることを目標に、教材化を試みた。

##### (2) 教材化について

高校1年で行われる漢文指導と、基本的には同じ過程で授業を進めることにする。そして、ルールの詰め込み式の授業は避け、興味関心を引く方法を模索した。また、階段を一段ずつ上がっていくように、ある程度のルールを習得した時点で、そのルールに従って読み解ける漢文を用意し、漢文が読めたという実感を与えていくように心がけた。

以下、授業略案（表一～表六）に従って、第一時・第五時について説明をする。

なお、題材の配当時間、簡単な内容は次の通りである。

題材 文化を創造する「春望……中国の詩」

(配当時間 九時間)

- (1) 漢文に触れ、その深い歴史と、日本の文化との関わりを理解する。……………一時間
- (2) 漢文訓読の基本的事項を理解する。……………六時間  
・基本用語の理解……………一時間  
・送り仮名の原則……………一時間

- ・ 返り点の種類（レ点）……………一時間
  - ・ 送り仮名、レ点の知識を利用して漢詩を読み解く。  
……………一時間
  - ・ 返り点の種類（一・二点）……………一時間
  - ・ 書き下し文の理解、返読文字、再読文字の理解  
……………一時間
- (3) 「春望」「静夜思」「元二送使安西」を訓読し書き下し文にしてから、語注を参考にして日本語訳をし、鑑賞する。……………二時間

### (3) 授業実践

【第一時】漢文に触れ、その深い歴史と、日本の文化との関わりを理解する。(表1参照)

漢文への本格的な導入として、漢字の成立ちを用いた。生徒が興味を持つと思われる新聞のサッカーに関する記事を、そのままプリントにしたものと、それを全て平仮名に書き直したものを用意する。始めに、全て平仮名のもを生徒に読ませる。(以下本文)

「……………にはほんはみうらかずよし(かわさき)が2とくてんをあけるなど、3-0できたちようせんにかいしょう。はつしろほしをあげたにはほんはつうさんせいせきを1しょう1ばい1わけ(かちてん3)とし、ほんたいかいしゅうつじょうにのぞみをつないだ。」

次に、漢字仮名混じり文になっている新聞記事そのままを読ませた。(以下本文)

「……………日本は三浦和良(川崎)が2得点を挙げるのなど、3-0で北朝鮮に快勝。初白星を挙げた日本は通算成績を1勝1敗1分け(勝ち点3)とし、本大会出場に望みをつないだ。」

生徒の感想は、やはり漢字仮名混じり文の方が読み易いと、期待通りだった。漢字の便利さを少しでも感じたのではないか。

次に、漢字が日本文化に与えた影響を理解する。文化は、文字がなければ発展しないし、日本独自の文字である平仮名・片仮名も、実は漢字が元になっていることを説明する。平仮名は漢字をつなげて略して丸みをもたせていくことによって成立した文字である。例えば、「以」が崩れて「い」、「宇」の部分を取って「ウ」になったなどの説明は、生徒には意外に興味深かったようである。

次に「桃夭」を全文書写する。書き下し文・音読と授業を進めて、これから行われる漢文の授業の概観を紹介する。書写・朗読は、特に大切にしていきたい。

「桃夭」は、流布している漢詩の中で最も古いものといえる。近休詩ではないものの、内容は娘が嫁いでいくときの父の喜びを詠んだものであり、中学生にも充分理解できると考えた。また、中国文学の歴史は日本のそれとは比較にならないほど古いことも伝える狙いでこの詩を選んだ。

でこの詩を選んだ。

【第五時】送り仮名、レ点の知識を利用して漢詩を読み解く。(表5参照)

漢文学習の基本用語を理解し、更に送り仮名・レ点を理解した段階で、その知識を利用して読み解ける漢詩を勉強することにした。杜甫の「絶句」を題材とした。

題材について……有名な五言絶句である。訓読する際に、返読する文字はレ点による1文字だけで、これまでの学習で充分読み解けると判断した。旧字体が使われているため、生徒に提示するときには新字体になおして紹介し、後から説明を加えることにする。また、解釈する際には、杜甫の生い立ちやその時の境遇を説明する必要があると考え、プリントを用意した。

先にも述べたが、漢文の学習をする際の軸を、書写・音読の2つと考えた。授業の中では漢詩に触れながら、なるべく多くの活動をさせたい。そこで、次のように授業を進めることにした。

- ①白文書写……板書に従い漢詩をノートに写す。
- ②訓点打ち……板書に従い訓点をノートに写す。
- ③書き下し文…自分で書き下し文にしてみる。
- ④音読……………範読に従い、音読をする。
- ⑤語注……………難解語句に注をつける。
- ⑥口語訳……………語注を参考に口語訳をする。
- ⑦解説・解釈…解説により作者の心情を理解する。

この手順は、基本的には、高校生で実施している漢文の授業と変わらない。しかし、中学3年生は漢文について持っている知識が少ないということを意識して、書写・音読に重点を置くと共に、語注・解説もなるべく丁寧に行った。

### (4) 今後の課題

基本的な知識の学習方法は大きな課題である。特に、訓点(返り点・送り仮名)の学習は、問題演習を繰り返す方法で行ったが、授業が単調になりがちで新しい方法を考える必要がある。

しかしながら、方法を模索していくことによって、高校1年で実施している漢文の学習を中学3年生の段階でも実施し、ある程度の効果が得られることが今回の実践で分かった。

本校は6年一貫教育で、今後の追跡調査が実施できる。本年度、漢文授業を実施した生徒が、高校での漢文授業にとのように入塾していったのかも、この実践の評価・課題となる。今後も、高校漢文への導入という視点を持って、中学での漢文授業の新たな方法を求めていきたい。

表一 【第一時指導略案】本時の目標：漢文に触れ、その深い歴史と、日本の文化との関わりを理解する。

過程	子どもの活動	教師の活動	指導上の留意点・その他
導入	①漢字の便利さについて考える 新聞記事（全て平仮名文・漢字仮名混じり文）読み比べ、漢字の便利さを考える。	①平仮名文の新聞記事を配布し、生徒を指名して読ませた後、漢字仮名混じり文の記事を配布する。	①新聞記事 全て平仮名文 漢字仮名混じり文
展開	②漢字の日本文化への影響を理解する。 「漢字は日本文化の源泉」であることを実感する。 ③実際の漢文に触れる 「桃夭」を書写する。 板書に従って、書き下し文を書写する 書き下し文に従って範読に続いて朗読する。 その意味を味わう。 ④日本語の中にある漢文（故事成語）を自覚する。 ⑤漢文は、日本語（古文）として読み下すことができることを理解する。 ⑥自分の名前を訓読してみる。	②万葉仮名の紹介。 平仮名・片仮名の成立を説明する。 ③「桃夭」を板書し、ノートに書写させる。 書き下し文を紹介し、日本語として読めることを伝える。 語句注をして、現代語訳を促す。 大器晚成 百聞不如一見 過猶不及 青取之於藍、而青於藍 ④授業者の名前「持山」を例に、訓読してみる。	③漢文Ⅱ中国の古典を説明。 万葉集（との比較）
終結	⑦「桃夭」を一斉朗読する。 ⑧次の時間からは、漢文を日本語として読み解く方法・規則を学習する。	⑦範読。 ⑧次時の予告をする。	

表二 【第二時指導略案】本時の目標：基本用語の理解 漢文・白文・書き下し文・訓読・訓点（送り仮名・返り点）

過程	子どもの活動	教師の活動	指導上の留意点・その他
導入	①漢文（中国語）を、日本語として読むことの意味を理解する。 ②自分や友人の姓を、訓読する。	①いくつかの熟語を提示して、それらを訓読させる。 ②「日本語として読む（訓読する）」ことを確認する。 ・語順が違ふ	①【日本語と同じ構造】 地震・年少・親友・最良 【日本語と違う構造】 帰国・読書・準決勝 【その他の構造】 無常・無能 ②音読み→訓読みにも注意させたい。

	③ 漢文は、歴史的仮名遣い・文語文法に従うことを確認する。	③ 「歴史的仮名遣い」「文語文法」を提示する。 地が震える→地震ふ 決勝に準じる→決勝に準ず など	③ 簡単に触れる。
展開	① 漢文を読む手順を理解する。	① 漢文→書き下し文(日本語の古文)→現代語訳の手順を説明する。	① 古文ということには軽く触れる。
	② 「春晓」の白文をノート写す。	② 「春晓」白文を板書して、ノートに書きさせる。 このままでは、意味が分からないことを確認する。	② 孟浩然「春晓」
	③ 「春晓」の書き下し文を板書し、ノートに写す。	③ 「春晓」書き下し文を板書して、ノートに書き写させる。	
	④ 範読の後について一斉朗読	④ 範読する。	
	⑤ 白文(中国語)と、書き下し文(日本語)との違いを考える。	⑤	④ 語順の違いと共に、漢文には書き下し文の平仮名の部分がないことを指摘できるとよい。
	⑥ 基本用語の確認をする。	⑥ 「春晓」を例に、漢文の基本用語を確認する。	⑤ 白文・書き下し文・訓読・訓点(送り仮名・返り点)
	⑦ 送り仮名の原則を理解する。	⑦	
終結	① 次時の予告	① 次時の予告をする。 次時は送り仮名について学習する。	①

表三 【第三時指導略案】本時の目標：送り仮名を理解する。

過程	子どもの活動	教師の活動	指導上の留意点・その他
導入	① 基本用語の確認をする。	① 「春晓」第一句を使って、白文・漢文・訓点(返り点・送り仮名)・書き下し文・訓読の各用語を確認させる。	
展開	② 漢文と、書き下し文の違いを考える。	② ・記号が付いている。 ・送り仮名が小さく片仮名で付けられている。 ・語順が違う。 などの答えを導き出す。	② 漢文は中国語で、書き下し文は日本語であることを再度確認する。
	③ プリント(三)を記入する。	③	③ 例文は、漢文ではないことに注意する。
	④ 送り仮名について理解する。	④ 送り仮名に付いての説明をする。 ・漢文には、日本語の助詞・助動詞に相当する漢字が少ない。	④ 【漢文入門】プリント参照。

	⑤ 助詞・活用語尾を理解する。	・活用がないので、活用語尾にあたる漢字がない。 ⑥ 助詞についての説明をする。 助詞のない例文を挙げる。 私 持山 (いいます。) 今日 天気 (いいです。) 活用語尾について説明をする。 本を【読む】。 景色が【美しい】。	⑥ 本当は、文語文法・歴史的仮名遣いに従うことには、軽く触れることにする。
	⑥ 送り仮名の付け方(漢文から書き下し文にする時)を理解する。	⑥ 書き下し文の漢字以外の部分を、送り仮名として漢字の右下に小さく片仮名で書くことを説明する。	
	⑦ 練習プリント(四)を行う。	⑦ 練習問題を行った後、各自、答え合わせをして、疑問点を出し合う。	
終結	⑧ 本時のまとめ		
	⑨ 次時の予告	⑨ 次時の予告 次の時間は語順が違ふ場合の対処の仕方を勉強する。	⑨ 前時に行った熟語を例に、し点を示す。

表四 【第四時指導略案】本時の目標・返り点(し点)を理解する。

過程	子どもの活動	教師の活動	指導上の留意点・その他
導入	漢文訓読の目的を確認する。	漢文(中国語)と書き下し文(日本語)に書き直すことができるように。	
展開	① 送り仮名の知識を確認する。 ③ し点を理解する。	① 前時の復習をプリントを用いて行う。 「渚清沙白鳥飛廻」を使って。 ③ し点の説明をしてから、プリントを使って確認する。 し点：すぐ下の文字から返って読む。 繰り返しの場合も含めて。	③ 返り点は、上の文字に付いていることを確認する。 上から下へ読み進めるのが大原則であることを確認する。 矢印を使って漢字の読み順を示す。 【プリント五・六】
	④ し点の練習問題・答え合わせ 指名された生徒は、黒板に出て答えを書く。	④ 「し点」の練習問題を実施する。 返り点 ↓ ↓ ↓ 読み順 読み順 ↓ ↓ ↓ 返り点	

表五 【第五時指導略案】本時の目標：これまでに学習した訓読の知識(送り仮名・し点)を活用して、漢詩「絶句」を書き下し文にし、語注にしたがって、口語訳をする。また、情景・作者の心境を想像し、解説により漢詩「絶句」への理解を一層深める。

過程	子どもの活動	教師の活動	指導上の留意点・その他
----	--------	-------	-------------

導入	①送り仮名・レ点の復習をする。 レ点の意味・練習問題	①生徒を指名して、レ点の性質を発表させる。 練習問題	①練習問題は、送り仮名・レ点の確認をするものとする。
展開	②【白文書写】 黒板に書かれた漢詩の白文を、ノートに正確に書写する。	②「絶句」を板書し、生徒に書写させる。	②板書は、全て新字体で行う。 プリント(資料その七)を使用する。
	③【訓点打ち】 板書された通りに、ノートの白文に送り仮名・返り点を記入する。	③黒板に書かれている白文に訓点を記入する。	③送り仮名・レ点の付け方に留意させる。
	④【書き下し文】 訓点にしたがって、漢文を書き下し文に改め、各自ノートに書く。 指名された生徒は、前に出て板書する	④ノートに各自書き下し文を書かせた後、生徒を四名指名して、板書させる。 札間巡視をする。	④
	⑤【朗読】 鑑読にしたがって、全員朗読をする。 指名された生徒は、朗読をする。	⑤鑑読をする。 生徒を指名して、朗読させる。	⑤
	⑥【語注】 理解しにくい語の説明を聞いて、全体の意味がとれるようにする。	⑥難解な語についての解説をする。	⑥
	⑦【口語訳】 語注を参考に、各自ノートに口語訳を書いてみる。 指名された生徒は、前に出て板書する。	⑦生徒がした板書をもとに、口語訳を行う。	⑦写真を使って、情景を分かりやすくする。
	⑧【解釈】 漢詩に読まれている情景・作者の置かれている状況・作者の心境を想像する。	⑧生徒の意見をまとめて板書する。	⑧
	⑨【解説】 「絶句」についての解説を聞き、理解を深める。	⑨漢詩に読まれている情景(季節)・作者が置かれていた状況を説明する。	⑨説明プリント(資料その八)による。
⑩実際の中国語での発音を聞く。	⑩実際の中国語の発音を流す。 中国語では理解できないが、手順を踏むことにより理解できることを再確認する。	⑩CDファンキによる。	

表六 【第六時指導路案】本時の目標：返り点の種類(一・二点)を理解する。

導入	①ノートに「守株」の白文を書写する	①「守株」(白文)板書	
	②「守株」の書き下し文を一斉朗読	②「守株」書き下し文を配布	②書き下し文プリント用意
展開	①白文と書き下し文の語順の違いを探す	①例を提示する。第一文で「有耕田者」	①置き字、助詞・助動詞をまず

<p>語順が違っている部分に線を引く (白文)</p>	<p>の部分の読み順が違っていることを指摘する。その後、各自同様の部分を探す。</p>	<p>指摘しておく。読みの難しい漢字には予め読み仮名をふる。</p>
<p>② 違っている部分を出し合う。</p>	<p>② 返り点が必要であることを確認する。</p>	
<p>⑤ 一・二点を理解する。</p>	<p>⑤ 一・二点の説明をする。 一・二点…二点の前に一点の付いている文字を読む。</p>	
<p>⑥ 一・二点の練習問題・答え合わせ 指名された生徒は、黒板に出て答えを書く。</p>	<p>⑥ 「一・二点」の練習問題を実施する。 返り点 ↓ ↓ ↓ 読み順 読み順 ↓ ↓ ↓ 返り点</p>	
<p>⑦ 難問作成用紙により、難問を作成する</p>	<p>⑦</p>	<p>⑦ 難問作成用紙。</p>
<p>⑧ 次のような場合にはどうしたら良いのかを考える。</p>	<p>⑧ 冀復得免 ↓ ↓ ↓ 復た免を得んことを冀ふ。</p>	
<p>⑤ 「守株」の白文に返り点をつける。</p>	<p>⑤ 白文の各文字の横に、読む順番を数字で記入させる。 読む順番に合うように、返り点をつける。</p>	
<p>⑥ 「守株」の白文に送り仮名をつける。</p>	<p>⑥ 前時の復習で、送り仮名の理解程度を知り、定着化をはかる。</p>	
<p>終結 ① 返り点・送り仮名の答え合わせをする</p>	<p>① ノートを交換して、互いに答え合わせをする。</p>	
<p>② 一斉朗読</p>	<p>② 範読をする。</p>	
<p>③ 次時の予告</p>	<p>③ 次は「漢文」を「書き下し文」に書き換える次まりを学習する。</p>	

## 2 漢文に対する生徒の意識と実力

### I. 漢文についてのアンケート結果 [中学総数60人、高校総数30人]

- 1) 漢文は難しいと感じましたか。 中学……はい 51人 (85%)  
 高校……はい 20人 (67%)

2) 次に挙げることは、理解できましたか。

- ①空欄への読む順番の番号付け。  
 ②書き下し文に従って、返り点を付ける。  
 ③書き下し文にすること。  
 ④平仮名にする文字がどれかということ。  
 × ⑤語句の読み、意味がわからないときの調べ方。  
 ⑥口語訳を聞いて、その情景・内容。

中学「はい」と答えた数	高校「はい」と答えた数
46人 (85%)	22人 (73%)
42 (70%)	24 (80%)
54 (90%)	26 (87%)
41 (68%)	19 (63%)
20 (33%)	9 (30%)
25 (42%)	17 (57%)

☞①②について「小テスト」を実施した結果、満点を取った人数。

- ①空欄への読む順番の番号付け。  
 ②書き下し文に従って、返り点を付ける。

中 学	高 校
28人 (47%)	18人 (60%)
25 (42%)	12 (40%)

3) 漢詩について次の事柄が理解できましたか。

- ①漢詩の形式 (五言・七言・絶句・律詩)  
 ②押韻の起こる場所、文字の認識  
 ③対句とは何か

中学「はい」と答えた数	高校「はい」と答えた数
52人 (87%)	19人 (63%)
24 (40%)	16 (53%)
39 (65%)	18 (60%)

☞ この結果、読む順番は流石に読み慣れた高校生のほうが勝っているが、返り点を付けることは普段やらないので、学習したての中学生のほうが勝っていることがわかる。情景・内容把握についても高校生のほうが勝っているが、その他は、学年の違いではなく、学習してからの時間と、知識の定着度によるものと思われる。したがって中学の時から、高校で行う漢文導入の指導を実施しても支障はないと考えられる。

### II. その後の結果

最初にアンケートを実施した中学生が高2になった時点で再度同じような項目でアンケートを試みた結果次の様なことになった。

- ①漢文は難しいと感じる生徒数→75% (前回85%)  
 ②内容については、書き下し文は98%の生徒が理解できたと答えている。  
 ③語句の意味については理解している生徒が52%と他の項目に比べて依然として低い値である。

2年経って再び同じ生徒達に漢文を数えることになり、最初の授業の時、次の資料の様にノートを作ることを提案した。(資料①②参照)

**1 段目**—教科書の本文を読み仮名を除いて写す (自文でよいならそれでも可)

この欄は後に板書事項などを記号で示したりして、どこの説明がなされたか明確になるように使わせたい (実際には、ただ本文を写して終わりになっている場合が多い)

**2 段目**—書き下し文を書く

読み仮名もこの欄に付けさず。以上のところまでは予習をしてやるように指示。

**3 段目**—板書事項を書く欄

読みが必要な語句、置き字の説明、重要句法、読解に必要な知識を色や枠をつけて説明。

**4 段目**—語句の説明を終えた時点で口語訳を考えて書く。(さらに内容読解へと進む)



資料① (文章の場合)

⑩ 詞曲の節を以て上下の節に分ちて 危き事なりと云ふ	詞曲の節を以て上下の節に分ちて 危き事なりと云ふ
⑪ 以て餘年余が節を以て上下の節に分ちて 一也。其の如しと云ふ	以て餘年余が節を以て上下の節に分ちて 一也。其の如しと云ふ
⑫ 思ふ公家節を以て上下の節に分ちて 不可なりと云ふ	思ふ公家節を以て上下の節に分ちて 不可なりと云ふ
⑬ 雖も我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	雖も我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも
⑭ 子孫孫無き節を以て上下の節に分ちて 可なり	子孫孫無き節を以て上下の節に分ちて 可なり
⑮ 而して平らかな節を以て上下の節に分ちて 可なり	而して平らかな節を以て上下の節に分ちて 可なり
⑯ 我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも
⑰ 帝其の誠を以て上下の節に分ちて 命を以て上下の節に分ちて	帝其の誠を以て上下の節に分ちて 命を以て上下の節に分ちて
⑱ 我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも

⑩ 其の節を以て上下の節に分ちて 可なり	其の節を以て上下の節に分ちて 可なり
⑪ 以て餘年余が節を以て上下の節に分ちて 一也。其の如しと云ふ	以て餘年余が節を以て上下の節に分ちて 一也。其の如しと云ふ
⑫ 思ふ公家節を以て上下の節に分ちて 不可なりと云ふ	思ふ公家節を以て上下の節に分ちて 不可なりと云ふ
⑬ 雖も我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	雖も我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも
⑭ 子孫孫無き節を以て上下の節に分ちて 可なり	子孫孫無き節を以て上下の節に分ちて 可なり
⑮ 而して平らかな節を以て上下の節に分ちて 可なり	而して平らかな節を以て上下の節に分ちて 可なり
⑯ 我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも
⑰ 帝其の誠を以て上下の節に分ちて 命を以て上下の節に分ちて	帝其の誠を以て上下の節に分ちて 命を以て上下の節に分ちて
⑱ 我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも	我れ死すも節を以て上下の節に分ちて 死すも我れ死すも

資料② (詩の場合)

B4

月下独酌

李白

① 花面一壺酒 独酌无相亲	花面一壺の酒 独り酌めて相ひ親しむもの無し
② 举杯邀明月 对影成三人	杯を挙げて明月を邀へ 影に對して三人と成る <small>(影の影法師)</small>
③ 月既不解饮 影徒随我身	月既に飲むを解せず 影はたすら我が身に随ふ <small>(擬人)</small>
④ 暂伴月将影 行乐须及春	暫く月の影を伴ひて 行楽の時は春に及ぶべし
⑤ 我歌月徘徊 我舞影零乱	我歌は月徘徊し 我舞は影零乱す
⑥ 醒时同交欢 醉后各分散	醒める時同に交歡し 酔つて後各々分散す <small>正長の時</small>

字一太白 号一青蓮居士 (詩仙)

① 花面一壺の酒 一壺に清きた	花を飲んで一壺に清きた酒を独り酌めて ひとりいる
② 対影成三人	杯を挙げて明月を邀へ 影を相手にして三人となる
③ 月既解飲 影徒随我身	月はもても飲むを解せず 影はたすら私の身に随ひて いる
④ 伴月相将影 行乐须及春	暫く月と影を伴ひて 春の興が衰へるまで楽しむ
⑤ 我歌月徘徊 我舞影零乱	我が歌をうたつと月は徘徊し 我が舞うと影は零乱する
⑥ 交歡同醒時 醉後各分散	正長の時はあまた共に楽しむ しかし酔つてしまつて各々散れ ゆかれて散つて行く

### Ⅲ. 問題点と解決の道

ある程度、書き下し文を書ける能力がある生徒達なので、ノート提出を時々求めながら授業をしていくと、授業の展開もスムーズになり、定期試験の平均点もほぼ6割以上になる。中学時代に書き下し文が指導してあるので、口語訳、内容読解に時間も回すことができ、広い授業の展開にもなる。何年かこの方法を通して、よかったと思う点でもある。

しかし、漢文教育の目的を考える上で欠如する内容がある。それは生徒のアンケート結果にも出ている通り、漢字、漢語に対する知識である。私自身がどう扱ったかを反省すると、週一時間の授業を展開するために、本来生徒が1つ1つ調べるべきである漢字の意味を、大部分こちらから明示し、復習の場合に聞くことになっている。初めて見る漢字、漢語は熟語を考えて意味を引き出す工夫に止まっている。一般に高校での漢文学習の入門期には(六書等の)漢字の成り立ちに多くの説明がなされている。しかし中学の教科書にはほとんどその説明はないため今回の指導の中でも、それには時間を用いなかった。生徒達は、漢文訓読の方法を楽しんで学んでいる。ところが、使用されている漢字、漢語が難しくなると壁にあたってしまう。訓読の方法はわかっているが文字の知識が足りないという大きな問題が生じている。(高校生になれば文字の知識は大丈夫かという問題は、どれだけ入門期に漢字そのものの説明に時間を使うかという問題でもある。))

もう少し、生徒の反応を考えてみると、内容面での漢文への興味も強いものがある。アンケート中「もっと詳しく情景や時代背景、作者の心情を知りたい」といった意向が37%ある。試みに訳を後で配布すると、手に取り熱心に読んでいる姿が見についた。漢詩・漢文の世界は今日の生徒にとっても、好奇心を引くものがあり、高尚なものとして考えられる面も多い。

では、どこで漢字・漢語に興味を持たせるのが有効かということになる。それには初めが新鮮でよいと思われる。中1のオリエンテーション時、漢和辞典については自由購入の形になっている。それが1つの問題であるかもしれない。中学後半から本格的に漢文教育を始めようと思えば、中1の時から漢字の成り立ちから懇切丁寧に指導していく必要があると思われる。さらに深く考えれば、漢字は日本文化、あるいは日本人の宝として認識されてよいものである。横文字文化にもよい所はあるが、漢字の持つ不思議な魅力を伝えていけば、生徒も自ら漢和辞典に手を伸ばすことになる。自らの反省も含めて、漢和辞典を授業中にもっと使用し、導入期にゆったりとした気持ちで漢文・漢字に触れる機会を持ちたい。中高一貫で指導を

考えるなら、時間的余裕も出てくるのではないだろうか。今後は中1の授業から高3まで連続して指導する場合を計画して、個人ではなく、国語科として取り組むべき問題でもある。

### Ⅳ. 生徒の感想から

【漢文を学んでいて面白かったこと、その他感じたことは何ですか。】

#### 【中学生】

- ・ひとつひとつ語句を調べて行くと、詩の内容がわかってくる。
- ・自分で想像した意味が、あっていたとき。
- ・この漢字はこういう意味をもって使われていたのかという発見がひとつひとつ楽しかった。
- ・漢詩は漢字を並べただけでなく、ちゃんとした規則によっていると分かったこと。
- ・全文を自力で読めたとき。
- ・日本人と物事の受け止め方や、表現方法が異なること。
- ・漢字だけで、始めは難しいと思ったけれど、分かると読むのがうれしくなる所。
- ・情景が分かったときの喜び。

#### 【高校生】

- ・中国の自然の雄大さ、昔の人の頭のよさ。
- ・数少ない文字に色々の思いだとか、情景が色濃く表されているところ。
- ・難しい漢字ばかりが並んでいて理解できなかったものが、実はこんなに感情のこもった文だったと分かったこと。
- ・ひとつひとつの漢字がかなり深い意味があること。
- ・詩の内容、情景が理解できたとき。
- ・現在の言葉・生活の源となっていること、ものが多いということ。
- ・作者のものの考え方・感じ方の表現方法。
- ・よく詩の中に、月や酒が出てくる。詩人は世捨て人っぽい人が多いのに、官職についていたり、官位をもっていたりする。

ある生徒の感想に「早く白文を自分で書き下し文にして読めるようになりたい。それにはやはり、繰り返し漢詩・漢文に慣れることが大切だろうから、高校に行ったら沢山の漢詩・漢文を読みたい。」と、あった。また、内容・情景が分かった時楽しいと多くの生徒が書いていた。これは、中学高校を問わない。漢詩・漢文は丁寧に、順を追って説明すれば理解でき、強いては難しくそうなものが分かったと

いう喜びに繋がると思われる。但し、時間との兼ね合いが課題となるので。国語の中の漢文の比重が今後どうなるかが問題となる。

### 3. 高校生との比較

——中学と同じ教材を用いて——

漢文学習の重要な点として文字そのものの扱いについて述べたが、ここでは、本場中国の小3程度で習うと思われる教材を中高合同で扱い、口語訳でどのくらい、イメージの違いが生じるかを見てみたいと思う。演習プリントは授業用に作ったもので本文のみが印刷されていた。授業では読み、書き下し文、語句の説明をした上で、口語訳を課題として提出させた。こちらから示した訳に続いて中学生高校生の実際の訳を紹介。

題「賦得古原草送別」

白居易

離離原上草  
一歳一枯榮  
野火烧不尽  
春風吹又生  
遠芳侵古道  
晴翠接荒城  
又送王孫去  
萋萋滿別情

りり けんじょう ぐさ  
離離たり原上の草  
いっさい ひと しか ことか  
一歳に一たび枯れ榮ゆ  
や かが や  
野火烧けとも尽きず  
しゅんぷう かつ たちしよ  
春風吹けば又生ず  
えんほう こと じゆう わか  
遠芳古道を侵し  
せいすい じゆう じゆう じゆう  
晴翠荒城に接がる  
また せんごん こと せいの せいの  
又王孫の去るを送れば  
せいせい として べいじょう 満つ

#### 【語句】

離離 きれぎれに草が茂るさま 草が長く茂るさま  
(擬態語)  
野火 野原で枯れ草を燃やす火  
遠芳 遠くまでつづく芳草  
古道 古くからの街道  
晴翠 晴れた日の草原の緑色 太陽の光に照らされ  
た緑色の草  
荒城 荒れはてた城壁  
王孫 もともとは帝王の子孫だが広く若者(友人)

の敬称として使う

萋萋 草の生き茂げるさま(擬態語)

#### 【口語訳】

きれぎれに生き茂げる野原の草は、一年に一度は枯れたり榮えたりする。野火も焼き尽くすことはできず、春風が吹けば、またしても生えてくる。

遠くまでつづく芳草が、古い道路をおかして茂げり、明るい草原のみどりが、荒れはてた城壁につづいている。

またしても、ここで若者の旅立ちを見送ると、萋萋と生い茂げる春草のように、離別の感情で胸が一杯になる。

#### 〈中学生の訳〉

##### 【例1】

広大な草原にぼつりぼつりと生えている草も四季がめぐるとに枯れたりまた盛いよく新緑の芽をふき出したりする。

田畑の土を肥えさせるためにこの草原に火を放ったが、春の風が吹くころになるとすばらしい生命力を感じさせるこの草達は再び草原に姿を見せる。

昔からあるみちの遠くからはよい草の香りがただよう。荒れはてたあの城壁まで、太陽の光に照らされ明るく輝いている緑の草がつづいている。友人などが別れていくのを送ったなら草が深く、生き茂げるように別れを悲しむ心持が心にあふれてくるなあ。

##### 【例2】

きれぎれに草が茂っている草原がはてしなく続いている。

一年に一回枯れたり生い茂ったりする。枯れ草を燃やしても燃やしてもなくならない。春になってすがすがしい春風が吹くと枯れた草原もまた活気を取り戻す。

遠くまでつづく芳草が昔からある道をも埋めつくしてしまうほどだ。荒れはててしまった城壁を太陽の光をいっぱい浴びた緑色の草がおおってしまっている。そんな所で一緒にいた友人が去ってしまうのを見送っている。心の中は周りの景色と逆に草が生い茂るように別れの寂しさでいっぱいだ。

##### 【例3】

散々と生き茂る草原で草達は一年に一度いっせい咲き乱れそして枯れてゆく。

枯れ草は焼いても焼いても尽きることはなく、春の暖かい風が吹けば、また新しい草が茂る。

遠くまで続く芳草は、昔しから続く道にさえ根を伸し、太陽の光に照らされた緑色の草々は、荒れた城壁を包

み込んでしまう。  
友人が去りすぎ、自分の胸は、ここにある草のように  
悲みでふくらんでいる。  
この光り輝く草が、今はとても淋しく見える。

【例4】

野原にきれぎれに茂げっている草は、一年に一度栄えて  
枯れてゆく。  
野原で枯れ草を焼いても焼いても残こっていて、春に  
なるとまた新しい芽が生えてくる。  
遠くまでつづく若草は古くからこの街道まで伸びてお  
り、太陽の光に照らされた緑色の草は荒れ果てた城壁  
につながる。そこで友人を去るのを送ると、草が生い  
茂るように別れを悲しむ気持ちが満ちてくる。

【例5】

きれぎれに草が茂っている草原は、一年に一回枯れて  
また栄える。火をつけた草は、焼いても焼いても底を  
つくことがなく、春の風が吹くころになるとまた草は  
はえてくる。  
遠くまでつづく若草は古くからある街道をうめつく  
し、太陽の光をあびた緑色の草は荒れ果てた城壁と一  
続きになる。また友人が去っていくのを見送れば、草  
木が生い茂るように別れをおしむ気持ちがいっぱいにな  
っていく。

〈高校生の詠〉

【例1】

古原草という題で「別れを送る」という詩を作る。  
きれぎれに茂る草原の草は  
一年に一度枯れ、そして生い茂る  
野火で焼いても尽きなくて、春風が吹く頃になると又  
生えてくる。  
古くからの街道は遠くまで続く芳草でおおわれてしま  
い、  
荒れ果てた城壁には太陽の光に照らされた草が生えて  
いる。  
また、友人が去って行くのを見送る時  
草が生き茂ってくる様に別れの哀しさが満ちてくる。

【例2】

野原に切れ切れに草が生い茂っている。一年に一回枯  
れたり、生い茂ったりする。  
野火に焼かれても尽きることがなく、春風が吹くころ  
になるとまた草が生い茂る。  
遠くまで続く芳草は古くからの街道に茂って見えなく  
し、太陽の光に照らされた緑色の草は荒れ果てた城壁  
に接している。また、若者が去っていくのを見送ると、

草が生い茂っている様に、別れの情で胸がいっぱいにな  
る。

【例3】

草原がきれぎれに広がっている  
一年で枯れ、また生い茂げる  
火をつけて燃やしても尽きることなく  
春風が吹くころになるとまた生い茂ってくる  
遠くまでつづく芳草が古い街道をおおうように茂り  
太陽の光に照らされた緑の草が荒れ果てた城壁に沿っ  
て生えている  
また友人が去っていくのを見送ると  
草が生い茂ってくるように別れのさみしさが心に満ち  
てくる。

【例4】

きれぎれに茂る平原の草 一年をめくる間に一度枯れ  
萌える  
その草々は焼いても尽きることなく 春の風が吹くこ  
ろまた平原にあらわれる  
遠く続く芳草は古い街道を侵し、太陽に照らされた緑  
草は荒れ果てた城壁にまでも接している。また友人が  
去っていくのを見送れば、草がおい茂ってくるように  
別れへの思いが満ちあふれてくる。

【例5】

きれぎれに草が茂る様子である草原の上では  
一年に一回草は枯れてしまうが、再び生い茂ってくる。  
野原で枯れ草を燃やす火は枯れ草を焼いているけれど  
も草は尽きることなく  
春風が吹けば再び芽を出し成長する。  
遠くまで続く芳草が古くからの街道を一面に覆い、  
太陽の光に照らされた緑色の草は荒れ果てた城壁につ  
ながっている。  
また若者や友人がこの地を去っていくのを見送れば  
草が生い茂ってくるように別れの情で胸がいっぱいにな  
る。

【例6】

きれぎれに草が茂る草原は一年に一度枯れてはまた生  
い茂る。野火は野原の枯れ草を燃やすけれど、草は尽  
きることなく春風の吹く頃になれば新しく芽を出す。  
遠くまで続く芳草は、古くからある道をかかしてしま  
う程生い茂り、太陽に照らされた緑の草は荒れ果てた  
城壁に続いている。また友人が去っていくのを見送る  
と、まるで草が生い茂ってくるように別れの悲しみが  
心に満ちてくる。

課題の提出にあたっては、中学生に対してより説明を加えたのは当然であるが、作品を見ると中学生の方にも独創的なものも多く含まれた。そもそも内容については、日本の高校生が習うものは、中国では小学校、中学校で習うものであり、漢字の意味さえある程度説明すれば同等に扱えると考えられる。生徒にもそのことを伝えながら指導したところ、余計に関心を持っていた。したがって中学での教材選択ももっと広がってよいと思われる。

#### ④まとめ

上に述べた中学教材の実態であるが、現在使用可能な教科書5種を調べたところ次の様になった。

1年は平仮名多用の書き下し文（一部のものに本文あり）内容は全て故事。

2年も大部分は仮名多用の書き下し文（本文付きのものは漢字対応の書き下し文）、内容は故事、論語、漢詩（4編）、桃花源。

3年は全て訓点付きの漢文、漢詩（2～3編）が多く一種のみ論語。旧字体の問題については5種とも使用されていない。

漢文という科目は、現代文、古文を習った上で学ぶものという意識もあると思われる。（漢字、歴史的仮名遣い、文語文法等の要素）が、寺小屋で暗唱をして学んだという過去の事態を考える時、中1で漢文に触れるのは決して無理なことではない。指導方法を熟考して1人でも多くの生徒に漢文の世界を知ってもらいたいものである。

手始めとして何をするか。それは生徒に漢文が読めるという意識を持たせることであろう。中学時代に書き下し文でよいから漢文の口調の良さを十分に味わってもらおう。暗唱するものもよいだろう。そして最後に斉読を試みてみたい。高校生になると、なかなか自ら発言することや、斉読ということは成立しにくい。これは習慣によって声が出せるようにしたい。中学生ならその点で活発に発言もできる。漢文の授業の基本であ

るとも思えるが、実行できない面もあるので斉読を習慣化を目指したい。

次の段階で漢文（原文）を見せる。そこで始めて訓読法に触れたい。さらに漢字ばかりが並ぶことに嫌気を起こさないため、漢字の語彙指導も並行して行う。場面に応じた漢字の読みや意味に基づき、語句の意味を煩推できる能力をつけさせることである。訓読法に話を戻すと、最初の段階では返り点をクイズでもやるかのように楽しんで学習する。レ点、一、二点、上下点、このあたりで理解不能になる生徒はほとんどでない。この時に返り点という記号の意味をしっかりと理解することは漢文への取り組みとして非常に大切なことである。

ここまでの指導を中学時代にしっかり実践しておくことと高校生になった時、ノートに書き下し文まで書くことは何の問題も感じなくなっている。あとは、内容に対して好奇心を向けるように教師の手助けが必要であろう。内容を知ろうという気持ちが起こって、立ち止まってしまう箇所があるとすれば、句法の部分であろう。句法については最初に出てきた時には説明なしには理解ができない。1度にまとめるのではなく、出てくる度に1つ1つ積み重ねていくのが無理がない。本校の場合、受験で必要という生徒には、補習などで句法の整理を行っている。

授業を円滑に進めるために私はノート作りにも重きを置いた。聞いているだけでなく書くことによって、漢文に親しむ。口語訳を整理していくと、どこで理解できないかが明確になる。ノートを点検することで生徒がどこまで学習したかも一目でわかる。少なくとも授業中、何をしたいのか「ちんぷん漢文（かんぶん）」ということとはなくなる。

以上、中学高校での実践を行いつつ、どうしたら難しいと思われている漢文に生徒の興味を引きつけ、さらに、日本文化の宝である漢字を正しく学んでいく体勢を築きあげるかを考察したが、1つの方法に固執することなく今後も漢文指導のあり方に心を掛けたいと思う。